

豚丹毒

豚丹毒は、豚丹毒菌（Erysipelothrix 属菌）の感染によっておこる豚・いのししの届出伝染病で、ヒトにおいて類丹毒の原因となる人獣共通感染症でもあります。古くから知られている病気ですが、現在も全国で年間2千頭以上の発生があり、と畜場では全部廃棄の対象となることから経済的な被害も大きい疾病です。

➤ 病原体

豚丹毒菌は哺乳類や鳥類にも感染し、土壌などの自然環境中に広く分布しています。また、健康な豚でも扁桃や消化管に保菌していることがあります。感染動物の糞尿や唾液中に排菌され、主に経口的に摂取することで感染します。

➤ 症 状

菌の毒力と豚の感受性によって症状は異なりますが、突然の高熱、食欲低下、1～2日で急死する急性の敗血症型、体表に淡紅色の丘疹が形成される亜急性の尋麻疹型、と畜場で発見されることの多い慢性の関節炎型と心内膜炎型の4つに大別されます。

➤ 発生予防

予防の基本は、適切なワクチン接種と飼養衛生管理の徹底により豚に抵抗力をつけ、飼養環境から菌を排除することです。

ワクチンは生と不活化の両方が市販されています。農場内における豚丹毒の浸潤状況や抗体の保有状況、導入元でのワクチン接種の有無などを考慮して適切なワクチン接種を心掛けましょう。

生ワクチン

皮下への1回接種で6か月程度免疫が持続するため、接種回数が少なく済みます。しかし、主成分が弱毒化した生菌であるため、接種時に母豚からの移行抗体や野外感染抗体を保持していると効果が抑制されてしまい、抗菌物質の影響も受けるとされています。飼料添加抗菌剤については影響がないとの報告もありますが使用には注意が必要です。また、まれに副作用として関節炎や、SPF豚・分娩前後の母豚で強い接種反応を起こします。



不活化ワクチン

豚丹毒の発生が認められる農場では不活化ワクチンの選択が望ましいとされています。移行抗体や抗菌物質の影響を受けにくく、発症リスクも少ないですが、4週間程度の間隔をあけて最低2回の接種が必要となります。

豚丹毒菌は熱や消毒剤に弱いですが、自然環境下での抵抗性が比較的強い菌でもあります。また、年間を通して発生が認められますが、発生には高温・多湿、密飼などのストレスが影響するとされています。豚舎の定期的な洗浄・消毒を実施するとともに日頃の飼養管理を見直し、ストレス要因の除去に努めましょう。